

## 第48回日本足の外科学会学術集会



会 長 安田 稔人 (看護学部 教授)

2023年10月26日(木)、27日(金)の2日間、大阪市のグランフロント大阪北館のコングレコンベンションセンターにて、第48回日本足の外科学会学術集会を開催させていただきました。まずは本学術集会の開催にあたり、助成をいただきました大阪医科薬科大学医師会の先生方に対しまして、心より御礼申し上げます。

日本足の外科学会は1976年に設立されて以来、45年以上の歴史を持ち、現在、会員数も1800名を超えております。一方、大阪医科薬科大学整形外科学教室は2022年に開講70周年を迎え、足の外科班は1989年に開設されました。以降、30年以上に及ぶ整形外科学教室足の外科班の歴史の中において、木下光雄先生(第23回学会長)、奥田龍三先生(第36回学会長)に続き、日本足の外科学会学術集会を主催できたことは大変名誉なことであり、嬉しく思っております。

足の診療は、急性期の外傷である骨折・脱臼、腱・靭帯損傷や疲労骨折に代表されるスポーツ傷害、足部の変性疾患・慢性疾患に加え、骨・軟部腫瘍、先天性疾患を含む小児期の足の障害、靴による障害や糖尿病性足部障害など幅広い疾患を対象とします。そのため、診療に際しては、医師だけでなく、看護師、薬剤師、理学療法士、アスレティックトレーナー、義肢装具士、心理士、栄養士など多職種が協働して診療にあたる必要があります。そこで、本学術集会のテーマは「これからの足の診療—チームの力、個の力—」といたしました(図1)。これからの足の診療においては、足の外科医一人ひとりの知識や技能、研究力の向上は大変重要ですが、同時にチームとしての力を向上

させることも欠かせないとの思いを込めました。現在、私は看護学部在籍し、本学が力を注いでいる多職種連携教育に関わっており、多職種が連携するチーム医療の大切さを学生とともに日々学んでおります。学術集会テーマに沿って、できるだけ日本足の外科学会の会員以外の皆様にもご参加いただきたいと思い、今回の学術集会では4つの学会と合同シンポジウムを企画しました。日本フットケア・足病医学会とは合同シンポジウムだけでなく、日本フットケア・足病医学会理事長の神戸大学教授の寺師浩人教授に「日本フットケア・足病医学会のこれから」と題してご講演をいただきました。また、日本靴医学会、日本リウマチ学会ともそれぞれの理事長にご賛同いただき、合同シンポジウムを行



図1：学術集会ポスター

いました。さらに韓国足の外科学会からも多くのゲストを迎え、日韓の合同シンポジウムを行うことができました。2つの合同シンポジウム「Achilles tendon disorders in athletes」、「Treatment strategy for severe hallux valgus」において、スポーツ選手のアキレス腱断裂やアキレス腱症、さらには再発の多い重度外反母趾の治療について日韓での活発な議論が行われました。本シンポジウムが日本足の外科学会(JSSF)と韓国足の外科学会(KFAS)の交流の場となり、両学会が今後もさらに力を合わせて発展していくことを願っています。また招待講演として韓国からWoo-Chun Lee先生に変形性足関節症の関節温存手術について、さらにパリオペラ座のスポーツ医であるXavière Barreau先生にバレエダンサーの足部傷害に対するチーム診療の実際をお話いただきました。

本学術集会のスタートには日本足の外科学会理事長の仁木久照先生に「Next 50 years！ JSSFの躍進～社会的価値と会員満足度の高い学会を目指して～」と題して基調講演を行なっていただきました。続いて、特別講演として奈良県立医科大学名誉教授の高倉義典先生に「若い足の外科医に伝えたいことー我国の足の外科医が果たした成果と将来展望からー」のタイトルでご講演いただきました。私自身は会長講演として「これからのアキレス腱断裂診療ーアスリートの早期スポーツ復帰のためにー」のタイトルで講演を行いました(図2)。特別企画としては、



図2：会長講演

大阪医科薬科大学名誉教授の木下光雄先生と日本足の外科学会理事長の仁木久照先生に「成人の扁平足について語り合う」というタイトルで1時間の対談を行っていただきました。扁平足の患者さんの多くの診察動画だけでなく、実際に壇上で、お二人の先生に模擬患者さんの診察をしていただき、対談形式でわかりやすく扁平



図3：特別企画  
模擬患者さんの診察風景



図4：特別企画(木下光雄名誉教授)



図5：教育研修講演  
佐浦隆一先生(本学リハビリテーション医学教室教授)の講演



図6：教育研修講演  
座長の根尾昌志先生(本学整形外科学教室教授)



図8：学会場風景  
学会場はとても賑やかな雰囲気となりました



図7：教育研修講演  
第36回本学術集會会長の奥田龍三先生の講演



図9：学術集會前日の晩餐会(ヒルトン大阪)

足の診断と治療を解説していただきました(図3、4)。教育研修講演は6講演でしたが、リハビリテーション医学教室教授の佐浦隆一先生や整形外科学教室教授の根尾昌志先生、第36回会長の奥田龍三先生にもご講演や座長をお願いしました(図5、6、7)。

会場はJR大阪駅と直結しており、天候に恵まれたこともあり、本学術集会には913名の皆様に会場に参加いただきました。92指定演題の他に公募演題として合計400演題を採用(優秀演題候補18題、主題51題、一般演題220題、ポスター111題)し、合計492演題を発表いただきました。第1会場から第6会場までワンフロアであったこともあり、学会場はとても賑やかな雰囲気となりました(図8)。多くの職種の皆様にご参加いただき、職種の垣根を超えた大変実りのある討論ができたのではな



図10：晩餐会で整形外科学教室の先生方とともに

いかと思っております。また、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが令和5年5月8日から5類感染症になり、4年ぶりに制限のない完全対面での学術集会を開催できたことを大変嬉しく思っております。学会前日のヒルトン大阪での晩餐会(図9、10)では、学長の佐野浩一先生と看護学部学部長の赤澤千春先生をお招きして総勢200名の皆様をお迎え

し、食事やお酒と共に、お二人のバレエダンサーに、『ドン・キホーテ』第3幕よりキトリとバジルの「グラン・パ・ド・ドゥ」をご披露いただきました。また学会初日の夜には全員懇親会を開催し、多くの先生方と親交を深めることができました。学会長としての学術集会の準備は非常に大変でしたが、学会が始まってみると2日間は大変短く、また楽しく感じ、学会2日目の午後には、もう学会が終わってしまうのだなという、少し寂しい気持ちが込み上げてきたことをよく覚えています。閉会式後に記念写真を撮影して終了となりましたが(図11)、会長として学術集会の開催を経験できたことは、私自身にとりましても大きな財産となると思っています。

3年前に学術集会の担当が決まってから、本当に多くの皆様のお世話になりました。主催事務局の大阪医科薬科大学整形外科学教室の皆様、事務局長の嶋洋明先生(平成9年卒・図12)をはじめ、大阪医科薬科大学足の外科グループの先生方、学術集会の企画・運営に直

接参画いただいた株式会社コングレの担当の皆様、ご協賛いただきました多くの企業の皆様、ご支援・ご協力をいただきました関連病院、同門の皆様に深く感謝申し上げます。最後になりましたが、改めまして大阪医科薬科大学医師会の皆様の本学術集会へのご支援・ご協力に、この誌面を借りまして心より御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



図12：講演風景(事務局長の嶋洋明先生)



図11：集合写真

チームの力を発揮し、盛会裏に学術集会を終えることができました

# 第74回日本皮膚科学会 中部支部学術大会



会 長 森脇 真一 (皮膚科学教室 教授)

第74回日本皮膚科学会中部支部学術大会を、「やくそく～ Wings for the Future～」をテーマに2023年10月28日(土)、29日(日)の両日、国立京都国際会館にて開催させていただきました。本学での本大会の主催は1960年の第11回大会(栗原善夫教授)、1979年の第30回大会(安原稔教授)、2003年の第54回大会(清金公裕教授)に次いで4回目、20年ぶりになります。

今回、特別講演として皮膚科医であられる松本吉郎日本医師会会長に医師会活動の現状、

今後の展開と皮膚科医へのメッセージを、名古屋大学環境医学研究所教授の荻朋男先生には私も専門にしております紫外線性DNA損傷修復についての最先端研究をご紹介いただきました。さらに招聘講演として米国Brigham and Women's Faulkner Hospital皮膚科教授、米国では女性皮膚医のリーダーのおひとりであるChrysalynne D. Schmults先生に皮膚がんの疫学、皮膚がん進展の分子機構のお話をいただきました。難病治療をテーマにした「遺伝性皮膚難病に挑む」、女性皮膚科医を演者とした「女性医師支援と皮膚科学研究」、「皮膚アレルギー最前線」、「皮膚がん治療最前線」という4つのシンポジウム、6つの教育講演、そして129の一般演題を賜り、ご参加いただいた1,550名の先生方におかれましては、紅葉が色づき秋深



学会ポスター



学会ホームページ

まる京都の地で、皮膚科医としてご自身のキャリアアップのための多くの知識をUPDATEしていただけたものと思っております。COVID-19感染症も落ち着き、ハイブリッド開催でしたが現地にも1,000名を超える出席者があり会長招宴、会員全員参加のカクテルパーティーも滞りなく行えました。

この度、大阪医科薬科大学医師会からは多大なるご支援をいただき、天候にも恵まれ、学術大会を盛会裏に終えることができました。大阪医科薬科大学皮膚科医局員一同、この場をお借りして御礼申し上げます。



スタッフ集合写真